

“産後祝膳”をはじめました

当院でお産をされたお母さんへ、お祝いと子育てへのエールの気持ちを込めて8月29日から“産後祝膳”を始めています。女性医師と栄養管理部門スタッフで【産後祝膳プロジェクト】を立ち上げ、“特別の日の一食”をご用意しました！

メニューは出雲市内のフレンチレストランのシェフとパティシエ&マダムご夫妻に院内の調理師らが直接指導を受け、完成したメニューです。

出産という人生の節目に当たり、心を込めた一食がお母さんの心と体の栄養になれば幸いです。

Menu

- ♡鯛のムニエル トマトソースがけマッシュポテト添え
- ♡松花堂弁当 赤飯／ビーフシチュー／野菜と高野豆腐の炊き合わせ／海老のタルタルソース
- ♡茶わん蒸し クコの実とコンソメソースがけ
- ♡野菜サラダとドレッシング ♡タルトとフルーツ
- ♡からだにやさしいハーブティ



外来診療表 <一般・初診>

平成29年11月1日現在

診療科	月		火		水		木		金	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
総合診療科	○		○		○		○		○	
精神神経科	○				○				○	
神経内科	○		○		○		○		○	
呼吸器科										
消化器科	○		○		○		○		○	
循環器科	○		○		○		○		○	
リウマチ・アレルギー科	○			○	○				○	
血液腫瘍科	○		○		○		○		○	
内分泌代謝科	○		○		○		○		○	
外科	○		○		○		○		○	○
乳腺科	○		○		○		○		○	
整形外科	○		○		○		○		○	
脳神経外科	○		○		○		○		○	
呼吸器外科			○		○		○		○	
心臓血管外科	○				○				○	
泌尿器科	○		○				○		○	
小児外科		週不定								
腎臓科	○		○				○			
形成外科		○			○				○	
皮膚科	○		○		○		○		○	
眼科	○		○		○		○		○	
耳鼻咽喉科	○		○				○			
歯科口腔外科	○		○		○		○		○	
小児科	○		○		○		○		○	
産婦人科	○		○		○		○		○	



中病だより

島根県立中央病院
2017年11月第31号

特集 高度救命救急センターへ

島根県立中央病院 山陰初 高度救命救急センター指定



新しい取り組み
航空身体検査
心臓血管外科 下肢静脈瘤に対するラジオ波血管内焼灼術
看護局 AI時代を見据えた教育

『中病だより』と統合しました 地域連携だより 第77号

表紙写真

当院の医療局長松原康博が平成29年度救急功労者表彰(総務大臣表彰)を受賞いたしました。9月8日に東京都で行われた表彰式への出席が叶わなかったため、10月12日に出雲消防、大田消防、雲南消防の皆さまをお招きし、救急功労者表彰伝達式を行いました。

詳細は8ページをご覧ください。

ご自由にお取りください

無料

中病だより

ホームページ <http://www.spch.izumo.shimane.jp/>
バックナンバーはホームページからご覧いただけます

Facebook
<https://www.facebook.com/ShimanePrefecturalCentralHospital/>

も く じ

特集 高度救命救急センターへ

センター長から

島根県立中央病院における救命救急医療

高度救命救急センター長 山森 祐治 ④

救命救急医の役割

救命救急科部長 新納 教男 ⑤

出雲でつなぐ手、指、思い

形成外科部長 岡本 仁 ⑥

命を守る最前線で患者、家族を支える

救命部門の看護師たち

救命救急看護部長 飯塚 淳子 ⑦

集中治療領域での臨床工学技士の活躍

臨床工学科長 藤井 義久 ⑧

医療局次長松原康博

救急功労者表彰受賞 ⑨

航空身体検査を受けられるようになりました

救命救急科医長 石田 亮介 ⑩

下肢静脈瘤に対する

ラジオ波血管内焼灼術について

外科診療部長・心臓血管外科部長 山内 正信 ⑪

AI時代を見据えた教育を考える

看護局次長 狩野 京子 ⑫

統合運用 北陽ビル管理のおしごと

北陽警備保障・北陽ビル管理共同企業体

吉田 広隆・小早川 俊文 ⑬

行事のお知らせ ⑭

地域連携だより第77号 ⑮

“産後祝膳”をはじめました ⑯

外来診療表＜一般・初診＞ ⑰



島根県立中央病院 高度救命救急センターへ

島根県立中央病院は平成29年8月31日
中四国地方では7番目となる高度救命
高度救命救急センターの使命とは、

高度救命救急センターとは

高度救命救急センターとは、重症及び複数の診療科領域にわたるすべての重篤な救急患者を24時間体制で受け入れる従来の救命救急センターの役割に加え、広範囲熱傷・指肢切断・急性中毒等の特殊疾病患者に対する救命医療を行うために必要な相当高度な診療機能を有するものです。当院は平成29年8月31日付けで山陰両県で初、中四国地方では7番目の高度救命救急センターとして指定されました。

当院はこれまでも、救命救急センターとして、さらにドクターヘリ基地病院、基幹災害拠点病院、県内唯一の総合周産期センターとして、あらゆる患者の受け入れに努めてまいりました。

高度救命救急センターの指定を受けたこれからも、引き

日付けで、高度救命救急センターの指定を受けました。山陰両県で初、救急センターです。

高度救命救急センターではたらく人々の役割・思いとは—

続き県の保健医療計画に沿って、全県を対象とした三次救急医療機能(※1)を担うため、ハイブリッド型手術室(※2)の整備、救命救急医の育成などハード・ソフトの両面から一層の救急医療機能の充実に取り組んでまいります。

沿革

- 昭和55年 第3次救命救急センターに指定
- 昭和56年 ICU(特定集中治療室)設置
- 平成5年 救命救急科開設
- 平成8年 基幹災害医療センターに指定(平成25年~基幹災害拠点病院)
- 平成17年 総合周産期母子医療センターに指定
- 平成23年 島根県ドクターヘリ基地病院として運航開始

- ※1 一時救急
外来で対処しうる帰宅可能な軽症患者の方に対応する救急医療
- 二次救急
入院治療や手術を必要とする中等症患者の方に対応する救急医療
- 三次救急
初期、第二次救急では対応が不可能な生命に危険が及ぶ重症・重篤疾患や多発外傷などの患者の方に対する救急医療
- ※2 ハイブリッド型手術室
手術室と血管撮影室という2つの異なる治療室を一つにした手術室。それぞれ別の場所に設置されていた機器を組み合わせることで、より高度な治療が可能となり、心筋梗塞や脳梗塞など血管疾患の治療に有効です。



救急外来の様子

高度救命救急センター長

やまもり ゆうじ
山森 祐治

昭和60年島根医科大学卒業、昭和62年同麻酔科教室入局。島根県内外の病院勤務、その間Yale大学留学、平成8年学位取得。平成15年島根県立中央病院着任。



センター長から

島根県立中央病院における **救命救急医療**

島根県立中央病院は、昭和55年に第3次救命救急センターの指定を受けてから島根県の急性期医療及び災害医療の中心的役割を担って来ました。この度、高度救命救急センターとして指定されたことを身の引き締まる思いで受け止めています。当院の救急外来では軽症から重症まで、老若男女全ての患者を受け入れており、救命救急科医が診察し24時間体制で待機している各科専門医の協力体制の下、病院全体で救急医療を支えるシステムとなっています。また、救命救急科での入院は、軽症から重症まで様々で、しかも外来から入院そして退院まで一貫して対応しています。このような運用を行っている救命救急センターは珍しいですが、患者さんにとっては切れ目の無い診療を受ける事ができる大変良いシステムだと思っています。このようなシステムを作り上げたのは、今年救急功労者表彰(総務大臣表彰)を受けた医療局次長松原です。当時はスタッフの数が少なく2-3名程度でしたが、その後当院の救急医療に興味を持った医師が集まり、現在ではスタッフ9名に増えました。今後も若い医師に魅力的な科であることをアピールし、仲間を増やしていきたいと考えています。島根県内の救急専門医は少ないため、今後はハード面の充実だけではなく、人材育成といったソフト面でも充実するように取り組んでいきたいと考えています。

これまで数多くの患者さんを診て来ましたが、心肺停止の少年を救命できた症例が今でも心に残っています。夕方、

ドクターカー要請があり医師二人で現場に向かいました。現場では救急隊員が蘇生処置を行っており、その処置を引き継いで当院に搬送、治療に難渋しましたが自己心拍再開となりました。集中治療室で脳低温療法を含めた集学的な治療を行ったところ、意識も回復し完全に社会復帰しました。救急隊が現場に到着するまで患者さんに寄り添って対応して頂いたのが学校の先生でした。先生は患者さんが入院後、毎日病院を訪れていました。意識回復し話も出来るようになったので、面会されませんかと声をかけたところ、涙を流して面会されたのを覚えています。その後先生が学校で「人の心の救命連鎖が支えたひとつの命」というテーマで命の大切さの授業をされたこと大変感銘を受けました。この症例に対する医療は決して特別ではなく、日常の医療が繋がった結果だと考えています。救命救急医療はとても派手な医療に思われるかもしれませんが、基本的で確実な診療行為が繋がって始めて救える命を救う事ができると考えています。救急隊の教育指導、病院前救急(ドクターカー、ドクターヘリ)、救急外来、集中治療を中心とした最先端かつ高度な医療、退院までの調整などの継ぎ目のない医療を提供することが我々の使命であり、究極の地域医療であると考えています。高度救命救急センターの指定を受け、より高度でかつ地域に目を向けた救急医療を目指し、スタッフ一同日々研鑽していく所存です。



救急医の役割 救命救急科部長 新納 教男

救急科専門医は、「病気」や「けが」、「やけど」や「中毒」などによる急病の方を診療科に関係なく診療し、特に重症な場合に救急処置、集中治療を行うことを専門とします。「病気」や「けが」の種類、治療の経過に応じて、適切な診療科と連携して診療にあたります。さらに、救急医療の知識と技能を生かし、病院内での医療にとどまらず、「ドクターヘリ」・「ドクターカー」で救急の現場に急行し医療を行ったりや、災害が発生した場合は災害医療の中心的役割を担ったりしています。

救急医療は人の身体を単に臓器別に細かく分けるものではなく、身体を分析的にかつ全体的に把握しつつ、患者さんにとって今何が必要か、後から悔いを残さないように早速やっておくことは何なのかなどと、総合的に診療をすすめていきます。そのなかで集中治療医学的な手法も用います。そして、病気であれ、けがであれ、急性に発症した様々な病態について、果敢に対応できる能力を有する医師が救急科専門医であり、当院の救命救急科・集中治療科の医師です。また、当院の救命救急科。集中治療科の医師の中には、「集中治療」を専門とするもの、「感染症」を専門とするもの、「災害医療」を専門とするもの、「急性中毒」を専門とするものなど、救急医療のなかでも得意分野を持つ医師が多数います。それぞれの得意分野を生かし、救命救急科・集中治療科のスタッフ全員で協力して診療にあたっています。

救命救急センターには様々な患者さんが受診します。なかでも、「重症熱傷」や「急性中毒」は特殊な病態であり、救急科専門医が得意とするところです。高度救命救急セン

ターとなった今後も、今までと変わることなく診療にあたります。

「やけど」は火事や事故による火炎や、高温物質、化学物質、放射線などによって起こります。「やけど」が全身におよぶ「重症熱傷」は植皮術や感染症対策を含めた全身管理が救命のカギとなります。急性期を乗り越えた後も、幾度となく山あり谷ありの状態を乗り越えて、形成外科と協力しながら、長い年月をかけ治療にあたります。

「急性中毒」はいつの時代も減ることはなく、むしろ原因物質は増加し、複雑化しているのが現状です。化学物質によるテロの発生や毒物混入事件も後を絶ちません。「急性中毒」においては、多種多様な中毒物質から原因物質を推定し、検体検査部の協力のもと原因物質を分析し、治療にあたります。

救命救急センターは、救急患者さんが最初に訪れる場所です。年齢、性別、急病やけがの別、重症度や罹患臓器を問わず、さまざまな患者さんが訪れます。また救急車で運ばれる患者さんのみならず、歩いて受診された患者さんが重症である場合も少なくありません。

すべての救急患者さんに最初の医師として救急診療をおこなうことが救急医の役割です。そして、内科や外科といった従来の縦割り医療と異なり、どんな疾患にも対応できる柔軟性を救急医は持ち合わせています。それは、高度救命救急センターとなった今後も変わることはありません。

各診療科を含めたスタッフ全員の協力があって、当院の救急医療は成り立っています。これからも「オール島根県中」で、島根県民の皆様に救急医療を提供していきます。

出雲でつなぐ手、指、思い

形成外科部長 岡本 仁

農作業中、工場で作業中、日曜大工をしていて、様々なシチュエーションで手の怪我をする可能性があります。バンドエイドを貼って済むような怪我なら良いですが、血管、神経、指自体の切断などの大けがの場合は、専門的な治療が必要となり、そのような治療に当たるのが高度救急救命センターであり、われわれ形成外科です。

切断した手指と患者さんをできるだけ早く搬送してもらい、骨固定、腱縫合、神経縫合、血管吻合することで切断した手指をつなぐ必要があります。そのため、救急車を使用することもあれば、遠隔地ならヘリコプターで搬送してもらいます。また搬送中は、切断した手指を湿ったガーゼに包んで冷やすことで細胞の損傷を抑えます。

病院に到着されたら出来るだけ早く手術室に移動します。もちろん控滅が強くどうしてもつなぐことが出来ない場合もありますが、出来る限り患者さんの希望通りにつなぐ努力をしています。

手術は顕微鏡を見ながら血管、神経をつなぐ作業となりますが、指先になると血管の直径は0.5mm以下となり、この血管を直径0.02mm程度の縫合糸を使って吻合することになります。この領域の手術はsupermicrosurgeryと称され、なかなか難しい作業となります。

ただ、日本人が器用というのは間違いないようで、外国の

事情に詳しい医師が言うには、指先をつなぐ手術は外国人はかなり苦勞するようですが、日本人は訓練次第でかなり出来るようになるということです。

私の場合も、血管吻合の練習、実際の手術を積み重ねることで、指先の血管吻合も出来るようになりました。

血管をつなげて指をつなげた後は、3時間ごとに血流を確認し、もし血管が詰まった場合は再手術となります。このため血流の確認は非常に重要で、担当医、複数の看護師が共同で確認しますし、精密機器をチェックする温度測定器などを使用し、異常にいち早く気がつくようにしています。

このように切断した指をつなぐためには、適切に搬送してくれる救急隊員、速やかに受け入れてくれる救命センター、すぐに手術室を用意してくれる手術部、絶対に指をつなげるといふ気持ちで手術する形成外科医、血管にトラブルがないか確認してくれる病棟看護師、そして指をつなげたいと願う患者さんの気持ちがひとつになる事が必要であり、そこまでしてようやく成功率が80~90%という難しい手術となります。

ですが、これからもスタッフ一同協力して、指をつなげていく所存です。

縁結びの地、出雲で指をつなぐ御縁に感謝しつつ・・・

大人の4本切断。気力、体力の限界まで出し切ってつなぎきりました。

1歳半の子供の指先の不全切断。今までで一番細い血管で、顕微鏡でもぼやけて見える状態で針先の感覚を頼りに吻合しました。幸いにも成功しています。



図出典：『安心して生活できる“ゆたかな地域社会”を目指して—県民の民さんとともに歩む島根県立中央病院』 島根県立中央病院 編者



命を守る最前線で

患者、家族を支える救命部門の看護師たち

救命救急看護部長 飯塚 淳子

高度救命救急センターでは、重症の外傷や広範囲熱傷、心筋梗塞や脳出血など生命の危機に直結するような重篤な患者へ高度な医療を提供しています。救急外来看護師は、診察の優先順位を判断するトリアージを行い、少しでも早く適切な医療が受けられるようにする役割があります。また、フライトナースはドクターヘリに同乗し医師と協力して現場での治療にあたっています。

重篤な患者の治療を担当する集中治療室は12床で運用しており、患者2名に対し看護師1名の体制で看護を行っています。患者の状態を正確に観察した上での的確な判断と実践や、患者やご家族の不安を和らげるケアを大切にしながら、少しでも早く元の生活に戻



救急外来での看護の様子

れるよう早期からのリハビリテーションも行います。

救命の最前線で患者さんとご家族の一番近くにいる看護師は、関係する多職種と連携しながら、患者さんの意思決定を支援できるよう日々研鑽しています。

高度救命救急センターで働く看護師には、わずかな変化を見逃さない観察力、幅広い知識や技術が求められ一瞬たりとも気が抜けない職場ですが、命の危機に直面していた患者さんが回復していく姿に喜びや達成感を感じ、それがやりがいや更なるステップアップへの活力になっています。

センターを支える人々

集中治療領域での

臨床工学技士の活躍

臨床工学科長 藤井 義久

集中治療領域には、医師および看護師だけでなく多職種のスタッフが従事し、それぞれの専門領域を生かし協力して患者さんの治療にあたっています。

私たち臨床工学技士(Clinical Engineer:以下CE)は技術支援と医療機器管理等を行い日々、奮闘しています。

集中治療領域では、ICU・心臓カテーテル検査・手術室等に勤務し、人工呼吸器・血液浄化装置・補助循環装置等の生命維持管理装置や各種監視装置および手術機器と多岐にわたる医療機器に携わっています。そのため、幅広い知識と専門性の高い技術が求められ、当院が掲げる高度医療の推進・実践のためCEも自己研鑽に努めています。

当院は第三次救急医療機関であるため、365日24時間、いつでも緊急患者の受け入れを行っており、CEも2015年より院内に常駐し現場要請への迅速な対応に努



ドクターヘリに医療機器を搭載する様子

めています。昨年度の夜間休日における集中治療領域からの対応要請は1165件で、CEとして専門領域を生かし医療に貢献しています。

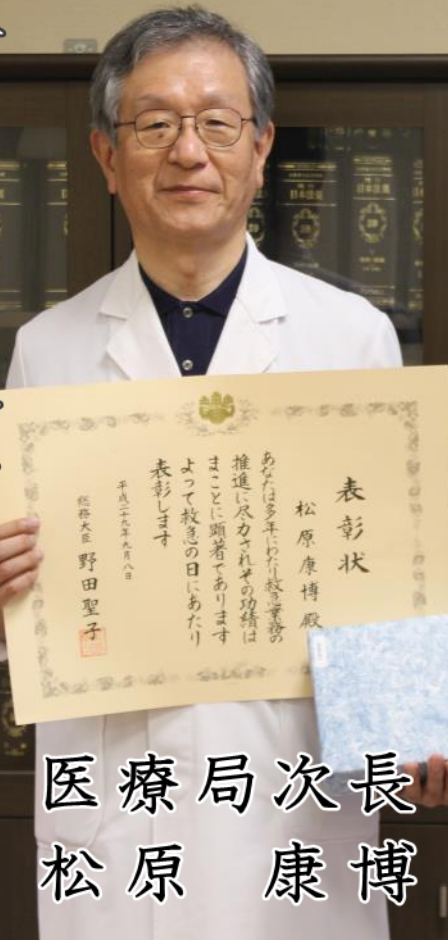
今後さらに、生命維持管理装置の操作ならびにトラブル処理を行うことは、CEの使命であり、医師・看護師が治療や看護に専念できるように努めています。

また、ドクターヘリやドクターカーの患者搬送においても、補助循環装置を必要とする場合はCEも同乗し、患者の安全を守るセーフティー機能の役割を果たしています。

救急功労者表彰
(総務大臣表彰)

受賞

医療局次長
松原 康博



この度、救急業務の推進に貢献し、社会公共の福祉の増進に顕著な功績があった個人及び団体を表彰する 総務省の平成29年度救急功労者表彰において、医療局次長 松原康博が総務大臣表彰を受賞いたしました。

島根県立中央病院救命救急センターにおいて平成5年から三次救急医療機関として重篤な救急患者を積極的に受け入れていること、救急隊員、救急救命士の資質向上および救急業務の向上と推進に大きく貢献したこと、出雲地区救急業務連絡協議会会長として救急業務の高度化に多大な貢献したこと等の功績が認められ今回の受賞となりました。

本人のコメント **受賞にあたり**

平成5年に島根県立中央病院に救命救急科として赴任し、病院内の救命救急応需体制構築や、ドクターヘリ、救急隊員教育等の病院前救急に係わることができました。その積み重ねを総務大臣救急功労者表彰という形で評価されたことを心からありがたく思っています。個人表彰という形ではありますが、救命救急科スタッフをはじめ島根県立中央病院の救命救急医療に対する使命感や、救急隊員の頑張りに支えられた結果であり、むしろ、これら組織の力を評価されたものに他ならないと言えます。これからは、次への継承を意識しながら、意気込みを新たに救急医療にかかわっていきたくと思っています。

航空身体検査を受けられるようになりました

指定航空身体検査医 救命救急科医長 石田 亮介

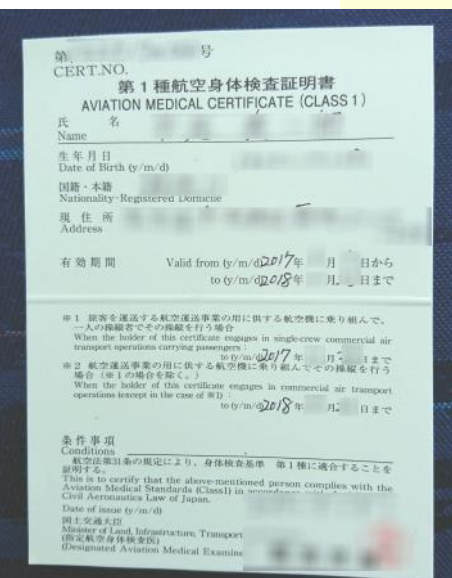
当院は平成29年10月1日付で国土交通大臣より、航空身体検査指定機関の指定を受けました。

旅客機やヘリコプターなどのパイロットが操縦を行うには、業務内容や年齢に応じて1年や6か月などの一定の間隔で、国土交通大臣に指定された医療機関の指定医師から「航空身体検査」を受検し、それに常に合格し続ける必要があります。指定医療機関はそもそも航空会社の拠点が都市部に多いことから、圧倒的に都市部に集中しており、中国地方には現在当院しかありません。地方においてもドクターヘリ、防災ヘリ、県警ヘリ、海上保安庁などの操縦士がおり、これまでは東京や大阪まで受検のため通う必要がありましたが、今回の指定で近隣での受検の選択肢が増えることになります。

航空身体検査では、安全な飛行のために、パイロットが心身ともに業務に必要な状態を保っているかを確認します。特に突然操縦が不能になるような病気を除外する必要があり、視力、平衡機能、聴力、心臓、精神状態などに

ついて多くの検査を必要とします。当院は身体検査に必要な設備を完備していることから、院内ですべての検査が完結します。異常が認められた際でも、精密検査のために他院を受診する必要はありません。万が一、身体検査基準に適合しない状態であったとしても、精密検査の結果を揃えて国土交通大臣の特別な判定(大臣判定)を受け、飛行の承認を得られる場合があります。これについても院内の各専門医の協力の下に出来る限り対応していきたくと思っています。

今後もドクターヘリ基地病院として、安定した航空医療の維持に努めていきます。



身体検査基準に適合したパイロットに発行される証明書

下肢静脈瘤に対するラジオ波血管内焼灼術について

外科診療部長・心臓血管外科部長 山内 正信

足の血管(静脈)が、蛇行して浮き出ているものを「下肢静脈瘤」といいます。原因は、静脈内の弁が壊れるためです。下肢静脈瘤は、両親や兄弟に静脈瘤がある人や、妊娠・分娩後の人、長く立ち仕事(美容師、調理師、店員など)に従事している、女性に多く、30才以上の6割以上にあるとされています。症状は、足の疲労感、むくみ、だるさ、こむらがり、湿疹、色素沈着、潰瘍(重症)などです。また、美容的な悩みの原因にもなります。静脈瘤の治療としては、軽症な場合は、弾性ストッキング着用や硬化療法を行います。中等症以上の場合、今まではストリッピング手術を行っていましたが、当院では2016年から血管内治療(ラジオ波)を開始しました。この方法は、膝のあたりから伏在静脈にカテーテルを挿入し、このカテーテルが120℃に発熱することで、血管を内側から焼灼して、閉塞させます。静脈が閉塞すると、足の下の方への血液の逆流がなくなり、症状が改善します。血管内焼灼術は、ストリッピング手術に比

下肢静脈瘤に対するラジオ波血管内焼灼術の様子



べ、術後の痛み、出血が格段に少なく、局所麻酔なので、術後すぐに歩行できます。都会では、日帰り手術が標準ですが、当院では、手術当日の経過を見るため、入院(2-3日)で行っています。膝から下の残った静脈瘤は、2-3mmの小切開で静脈瘤を切除するスタブ・アパルジョン法を行います。小さい傷なので、時間経過とともにほとんどわからなくなります。長年、足の静脈瘤が気になっている方は、ぜひ当科を受診してご相談下さい。

AI時代を見据えた教育を考える

看護局次長 狩野 京子

看護局(局長池田康枝)は、このほど、「AI時代を見据えた教育を考える」をテーマに学習会を開催しました。将来的には現在の職業の60%がAIにとって代わるという状況において「AIの可能性を見極めたくて看護の未来はどうあるべきか」との思いが今回につながりました。当院の多職種に渡る職員や看護学生、県内の教育関係者など80名が参加しました。

AI時代の教育と評価

鈴木敏恵氏(次世代教育クリエーター・一級建築士) AIは膨大なデータをもとに高度な分析と人を超える予測が可能で、目的を与えれば優秀に働く。しかし未来を夢見る心や、物事の意味や価値を大切にする「感性と気づく力」は人間だけに与えられ、目的をもって目標に向かう意志ある学びの実践は人間だけができる。これを支援するツールは、プロジェクト学習とポートフォリオ(プロセスの評価)そして、対話コーチング(思考の確認)である。

参加した元教員は、「AI時代の評価は結果よりプロセス。建築の世界の方から教育のあり方を聴くことは目から鱗。今求められる教育の方向性を理解できた」とした。

医療用ロボットの実演とハイテク車椅子の試乗

檀山康明氏(MIKOTOテクノロジー社長)

気管内挿管や吸引などのトレーニング機能を持ち、人間の肌に近い感触で、瞬きや痛みなどの音声を発する。看護学生は「人間と同じような感覚で驚いた。関心が湧いた」と。ハイテク車椅子は、座席が前屈みになり膝・腰・胸の3点で支えて立ち上がる。参加者は「障害のある方の就労支援につながる」と評価した。



今後も、このように地域の皆様と情報共有していきたいと考えております。



学習会を終えて

統合運用

北陽ビル管理のおしごと

北陽警備保障・北陽ビル管理共同企業体

吉田 広隆・小早川 俊文



警備員室の様子



救急車両点検の様子

私共、北陽ビル管理株式会社は、平成10年より県立中央病院において設備管理業務を行ってまいりましたが、今年4月より関連会社の北陽警備保障株式会社と共同企業体を組み、新たに施設警備業務および救急搬送業務を受注いたしました。弊社は施設警備業務を担わせていただいております。

前年度まで業務に従事されていた経験豊富な島根県の嘱託社員の方を多数採用し、また業務開始前に事前教育を行うことで順調にスタートを切ることができました。

一方、救急搬送業務は、北陽警備保障株式会社が担当しています。緊急車両運行においては、24時間体制で6名の交代制にて対応しています。転院される患者さんの搬送やドクターヘリ待機基地である出雲空港へのドクターの緊急搬送などに、万全を期するため、車両の点検、医療器具のチェックを行い緊急出動等に、即応、即動体制を常に維持しております。

私共、共同企業体は、常に皆様方から信頼され感謝される企業を目指し、日夜邁進しております。これからも皆様方の安心・安全を守り、俊敏な対応を心掛け頑張っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

中央病院に遊びに来てね！

行事のお知らせ

患者さんやご家族、一般の方を対象とした行事を予定しております！ぜひお気軽にご参加ください。

◆なごやかサロン 勉強会

食事を楽しく食べる工夫

日時：平成29年11月24日（金）13:30～14:30

会場：島根県立中央病院 2階 会議室2

対象：がん患者さんやそのご家族、興味をお持ちの方

内容：管理栄養士によるお話し

講師：島根県立中央病院 管理栄養専門員 周藤 紀子

参加：参加費無料。申し込み不要。

問合せ：当院入退院支援・地域医療連携センター 担当 萬代 TEL0853-30-6500

◆平成29年度市民公開講座

脳卒中はチーム医療で乗りこえよう

日時：平成29年12月17日（日）13:30～16:15

会場：島根県立中央病院 2階 大研修室

内容：医師による病気の説明や、当院で行う最新治療の紹介。また、それぞれの専門スタッフが日常生活復帰へ近づくリハビリテーション、食事での脳卒中予防、脳卒中のお薬について、さらに退院する際の地域連携についてお話しします。

参加：参加費無料。申し込み不要

問合せ：当院総務課 TEL0853-22-5111（代表）

詳細は院内の掲示板やホームページ、Facebookに掲載するポスターをご確認ください。

地域連携だより

第 77 号

平成29年11月17日

出雲市姫原4丁目1番地1

島根県立中央病院

入退院支援・地域医療連携センター

TEL 0853-30-6500

FAX 0853-30-6508

医療ソーシャルワーカーをご存知ですか？

地域医療連携・医療福祉相談スタッフ 社会福祉主任 萬代 由喜子

当院には、現在7名の医療ソーシャルワーカー(MSW)が勤務しています。MSWは、病院で働く福祉の専門職です。近年は、在宅での医療・介護サービスが充実しつつあり、点滴などの医療処置等があっても自宅での生活を選択される方が増えてきました。そのため、入退院支援・地域医療連携センターの看護師と協働し、医療的な側面と福祉的な側面から退院後の生活を患者さんやご家族と考え、院内外の他職種と連携して退院支援を行っています。

病気は、時に、自分の身体への心配を抱えるとともに、それまでの生活を大きく変える要因となります。入院費や生活費などの経済面、仕事や自治会などの地域での役割、育児や家族の介護などの不安が生じます。当たり前で続けられると思っていた日常が日常でなくなる不安を受け止め、問題の解決を支援するのがMSWの役割です。相談者からの置かれている状況や思いを聴き、個々のケースに合った解決方法を一緒に考えていきます。

院外との連携では、出雲圏域のMSW等で組織する病病連携会議をはじめ、行政や介護施設、ケアマネジャーなどと

のネットワークづくりも重要な仕事のひとつです。さらには、糖尿病友の会、せきそんのつどい、出雲KA(人工肛門・人工膀胱造設者)友の会の事務局、なごやかサロン(がんサロン)、ほのぼのサロン(重症心身障児)の活動支援により患者間のネットワークづくりも担っています。

私たちは、患者さんの思いに寄り添った、生活を途切れさせない療養生活の支援を目標に業務に当たっています。小さなことでも相談していただいたら、解決の糸口がつかめるかもしれません。MSWを患者さんやご家族の生活を豊かにするひとつの社会資源として活用してください。



当院の医療ソーシャルワーカー

新任医師からのしあわせ



産婦人科 ささもり ひろき 笹森 博貴

多くの患者さんのお役にたてるように頑張ります。 よろしくお願ひいたします。

地域医療従事者対象 研修会等のお知らせ

PCA ポンプ 研修会
日時 平成29年12月9日(土)14時～16時
場所 島根県立中央病院3階会議室1
内容 第1部：講義
「PCA ポンプとは、医療用麻薬導入メニュー、医療用麻薬換算表」
講師 総合診療科部長 今田 敏宏
「薬剤師連携の実態と活動状況」
講師 ファーマシィすこやか薬局 山陰エリア副エリア長 熊谷 岳夫 先生
第2部：グループワーク PCAポンプ演習
申込 所属、氏名、職種、連絡先を記入の上、メールにてお申し込みください。11/30締め切り。(担当：小松) 621345rr@spch.izumo.shimane.jp

出雲医師会・島根県立中央病院合同 CPPC (臨床薬理病理画像検討会)
日時 平成30年1月18日(木) 18時30分～20時00分
場所 島根県立中央病院大研修室
内容 担当医師がプレゼンターとして症例、放射線科医師の画像診断、病理組織診断科医師の解剖病理診断を提示する形式で行い、また薬理として担当薬剤師も参加します。初回臨床研修医と各科専門医による症例検討を致します。症例内容は後日ご案内します。
申込 不要